



わたしのしゅうぜん横町

西川紀子作 浅野輝雄画

わたしのしゅうぜん横町

西川紀子作 浅野輝雄画

江苏工业学院图书馆
藏书章

わたしのしゅうぜん横町



著者 にし かわ とし こ 西川紀子
発行者 岡本陸人
印刷 新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（オフセット）
製本 大徳製本株式会社
発行所 株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1 〒101
電話 03(263)0641〈代〉
振替 東京 3-64150

1981年4月25日第1刷

NDC 913

8393-16718-0027

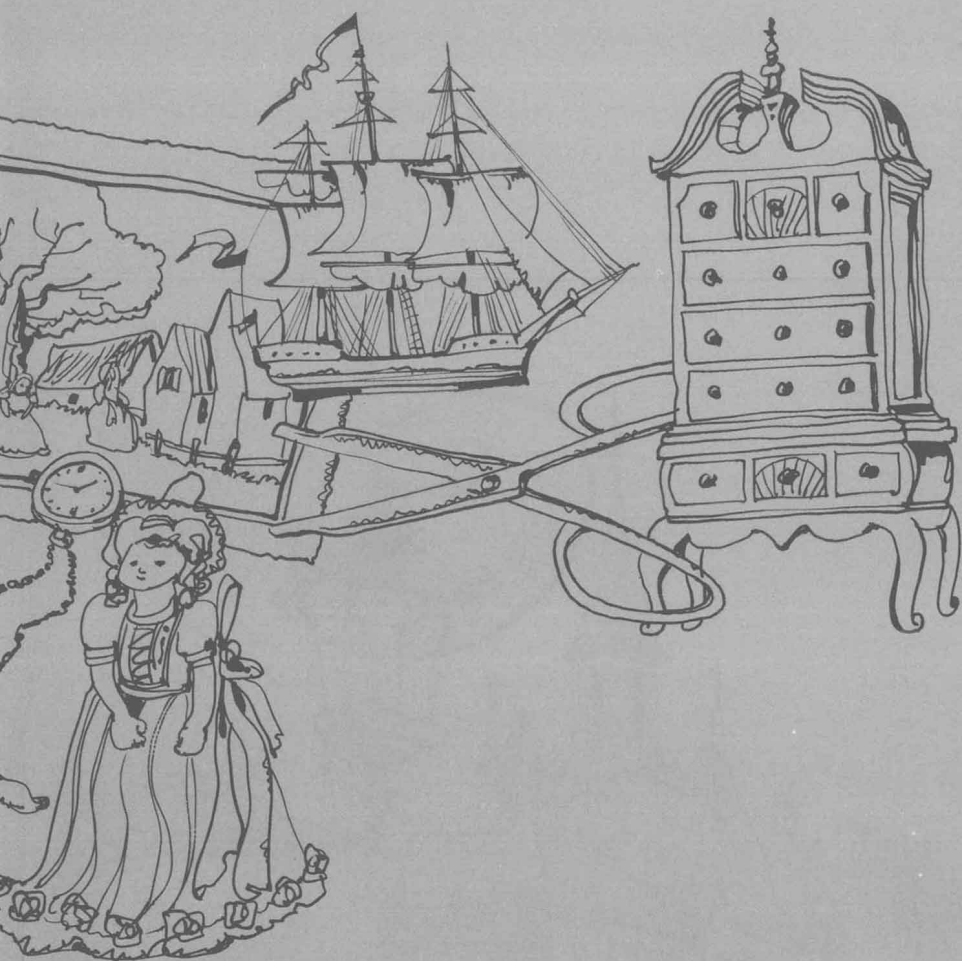
西川紀子
わたしのしゅうぜん横町
あかね書房 1981
157p 21cm（あかね創作児童文学18）

© 1981 T. Nishikawa 著者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

しのしゅうぜん横町

もくじ





大昔の水くみ場で*6
おおむかし

1 たんす屋の話*16

2 カード屋の話*29

3 鏡屋の話*44
かがみや

4 人形屋の話*53
にんぎょうや

5 キスタ屋の話*68

6 刃物屋の話*85
はしのや

7 タペストリ屋の話*101

8 ねんど細工屋の話*117
ねんどさいくや

9 ロケット屋の話*134

わたしのしゅうぜん横町*150
しゅうぜんよこまち



著者紹介

西川 紀子（にしかわ としこ）



児童文学学校第一期生。

現在、〈小さな窓の会〉同人、文学集団〈木の会〉の一員。

「少女の四季」で第八回北川千代賞を受賞。

作品に「ちこの人形」「白い右の手」などがある。

現住所 千葉市土気町一六七九

一五三

画家紹介

浅野 輝雄（あさの てるお）



一九四二年愛知県に生まれる。

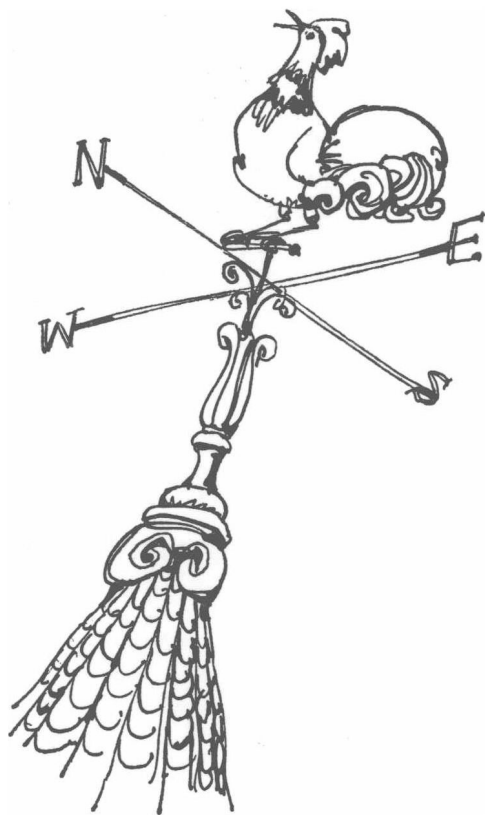
高校美術課在学中に中部日本画展入賞。日大芸術学部洋画科在学中より各種の美術展に出品。七七年ヨーロッパ旅行のちスペインで生活、個展を開く。七九年帰国し、現在、油絵製作と出版の仕事にたずさわっている。絵本の作品に「なしの子ペリーナ」がある。

現住所 埼玉県東松山市松葉

町三一五・三九

わたしのしゅうぜん横町

西川紀子作／浅野輝雄画



大昔の水くみ場で



（おかしいなあ、道をまちがえたのかなあ。このへんにあるはずなんだけど。）

わたしは、足をとめて地図をひろげました。

小さな丘をぎっしりとおおう家々、その間をあみの目のように走るせまい通り、こきざみの石段。地図のまん中、町の中心の高みには、チャペルの塔があります。

さっきから、わたしがさがしているのは、この小さな町のなかほどにあるという、大昔の水くみ場です。

（ええっと、わたしはいま、どこに立っているのかしらん。よその国の地図というのは、どうも見にくいなあ。）

あんまり道が曲がりくねりしているので、自分がどう歩いてきたのか、どの方角をむ

いているのか、さっぱりわからなくなってしまいました。

旅先でたずねたはじめての町は、どこかよそらしく、心細さが、胸にさざ波だつてきます。

（だいじようぶよ。こんなちっちゃな町なんだもの、歩いていればみつかるみつかる。）わたしは、自分を元気づけ、地図をとじてふたたび歩きだしました。

両側には、すきまもなく家が建ち並んでいます。家々の屋根は、とりきめでもあるようにすべてれんが色、壁はクリーム色。それが、さびた色に年を経ています。

岩をくりぬいて造った一階の上に、二階三階をせり出している家、まるでわたしのしかかってくるような、大きなドアのアパート、岩の上に並べた丸太の上に家を建て、それが道をまたいでいる、そんな家もあります。

石だたみのせまい道は、ひっそりと静かで、黒くまるい敷石は、すりへつてかめの甲らのよう。

パイプをくわえたジャンパー姿のおじいさんが、犬をつれてゆつたりとすれちがっていききました。

右へ曲がり、左へ折れしながら、十段ほどのめずらしく長い石段を登った時です。

目の前が明るくひらけたと思ったら、そこは、小さな広場。そして、中央にあるのは、青銅でできた二人の男の子が、左右から重たそうに水がめを支えている水くみ場。

「あった！」

思わず叫んで、わたしはかけよりました。

つややかに黒光りするはだかの男の子は、ぶくぶくした小さい足をふんばって、水がめのおしりを持ち上げています。首をかしげ、くちびるをぶっとがらせて、一心に水がめの口を見つめている表情は、真剣そのもの。

「いただきます。」

わたしは、二人の男の子にちょっとあいさつをして、そろりとせんをひねりました。

水が一すじ、流れ落ちます。

（これが、大昔から続いている水。千年も二千年も前の人がのんだ水。そして、いま生きてるわたしが、のもうとしている水。）

わたしは、不思議な生きものでも見るようにながめました。

手の甲、てのひらをぬらしました。とても冷たい、だけどやわらかな水です。口にふくみました。

大昔おおむかしから流れ続つづけてきた水だと思うと、ゴクゴクのんではもったいない気がします。

わたしは、おしいただくように両手に受けては口に入れました。目を細めて、水をかみしめ味わっていると、すぐそばでクスクスという笑わらい声がしました。

その声があんまり近かったので、一瞬いつしゅんわたしは、水がめを支ささえている男の子に笑われたかと思ったくらいです。

「おいしいでしょう、この水は。」

ふりむくと、大きな水差みずさしをかかえたおばさんでした。

「ごめんなさい、ひとりじめして。」

わたしは、あわてて立ちあがり、おばさんに場所をゆずりました。

おばさんは水をくみながら、昔は、水をくむのに毎朝ぎょうれつ行列したことが、うしろ側がわの石囲いしがこいは洗濯場せんたくばで、足でふんづけながらみんなで洗濯したことが、くたびれると石囲いしがこいのふちに腰こしをおろしてひと休みしたこと、いまはもう、水をくみにくる人もちらほらだということなど、話してくれました。

おばさんが行ってしまうと、あたりはまたひっそりとしてしまいました。

わたしは、石囲いしがこいのふちに腰かけると、おばさんがさし示しめしてくれた地図の場所に、

水くみ場のしるしを書きこみました。

「さてと。」

わたしが、地図を見ながら、どっちへ行こうかと考えていると、どこからあらわれたのか、男の子が、わたしの前ににゅつと立ちはだかりました。

五、六歳さいでしようか。むちむちと太ふとった、色の浅黒あさぐろい男の子です。

黄色い帽子ぼうしをうしろ前まえにかぶり、茶のセーターに、つぎ当あてだらけの紺こんの半ズボン、すりきれて指ののぞくズックぐつをはいています。

地図がおもしろいのか、外国人のわたしがものめずらしいのか、男の子はきょろりと大きい目をいたずらそうに動かしながら、わたしを見えています。

「なあに？ あんた、だあれ？」

わたしも負けずにしげしげと男の子を見かえしていました。

返事へんじはありません。男の子は、肩かたをすくめると、にゅと歯はをむき出して笑わらいました。笑うと、両ほほに指でつつきたくなるような深いえくぼができます。

「おうち、どこ？」

やっぱり、男の子はだまっただきりです。



「この町の道は、迷路めいろみたいね。地図見てると、目がつれてしまいそう。でも、せつかくきたんだもん、わたし、もうすこし道草みちくさしていくことにするわ。」

男の子の顔を見ながら、大きなひとりごとをいって、わたしは立とうとしました。すると、その男の子が、わたしをつついてあごをしゃくりまわす。

「え？」

わたしが首をかしげると、男の子は、もう一度大きくあごをしゃくりまわした。こっちへきな、おれについてきな、といっているようです。

「わかったわ。でも、どこへ行くの？」

わたしがいうと、男の子は、いきなり先に立ってかけだしました。わたしもひっぱりながら、あとからついていきました。

小さいくせに、その足の速いはやこと。右に左にと折れ曲まがり、三段五段だんの石段を登のぼったり下りたりしながら、男の子はかけていきます。

なんどめかに右に折れると、そこからはいちだんとせまく暗い、切り通しのような道になっていました。

ふと見上げると、通りのまん中、わたしの頭の上に、古びたランプが一つ。ぽおっと

やさしい光を投げています。あわいみかん色のその光に、わたしは、なつかしいものに
出会ったような安らぎと、この町がきゆうに身近になったような親しさを感じて、ほっ
と体の力をぬきました。ランプあかりは、

「やあ、きましたね。」

「くつろいでくださいな。」

と声をかけてくれているような気がします。

ランプにばかり気をとられていましたが、その下に、大きな横長の木の看板がかっ
ています。両側の家の壁に打ちこまれた鉄の金具が、それをしっかりとつり下げていま
す。

灰茶色の部厚い板は、角がすっかりまるくなったり、欠けたりしているし、表面は、
虫くいだらけの穴だらけ。よほど昔からある看板とみえます。

看板には、なにやら文字が彫りこんであります。虫くいのため、雨風のために、りん
かくがよろけたり、線が消えてしまっている文字に、わたしは目をこらしました。かろ
うじて読みとることができません。

「し・ゆ・う・ぜ・ん・横町。い・ゆ・ぜ・ん・横町ですって！　なんておもしろい通り！」

目をくるとまわして、わたしは、顔を正面にむけました。

手をひろげると、両側の壁にときそうなせまい通りです。同じ造りの三階建ての家が、しっかりと肩をくんだように並んでいます。二百メートルほど続いているでしょうか。家の谷間で、石だたみが黒々としずんで見えます。

どの家にも、がっちりとした重々しい木のドアがついていて、ノブばかりがびかびか。ドアの上には、しゅうぜん横町の看板をうんと小さくしたような、細長い看板が、とりつけられています。お店のようです。

むこうから、二人づれが話しながら歩いてきます。大きなおなべを両手にぶら下げたおばさんと、口がぱっくり開いたハンドバッグを持ったおばあさんです。

おなべのおばさんが、一軒の家に入っていきました。ハンドバッグのおばあさんは、わたしの立っているところにすぐ近いドアの中に消えました。

その二人のようすをながめていたわたしは、はっと思ひあたりました。

（ここは、しゅうぜん屋ばかりが集まっている横町！ だから、しゅうぜん横町！ きっと、そうよ。）

わたしは、自分のことばにうなずいて、すいこまれるように看板をくぐりかけました。